

あえて大先生と呼ばせていただく。私事で申し訳ないが、自分にとっては雲の上の存在の方だ。6年生が阿下喜樂を始めるにあたって、「地域で生きる方」に阿下喜を語ってもらいたいという願いがあった▼当初は拒まれていたが、「話そう」という気持ちになっていただけたのは、6年担任の阿下喜樂に対する熱い思いに賛同していただけたからである▼阿下喜の100年前の写真からどこを撮った写真なのかを考えた。ピンと来ない子には、70年前の写真が渡される。大先生はこんなことを言った「なぜそう考えたのかを教えてほしい」クイズではないのだ▼阿下喜にどんなお店があったのかを教えてもらった。「お饅頭屋?」「旅館があったの?」「八百屋?」100を超えるお店があったことを教えてもらった。最後に少し触れてもらったのは、「員弁川の流れを変えたんだよ」「阿下喜小学校は阿下喜で一番高いところにあるんだよ」▼子どもたちの頭の中は不思議のタネでいっぱいになっていく。答えは教えてもらえない。子どもたちの「どうして?」から探求が始まるからだ▼阿下喜樂は「プロセス」を大切にする。願わくば自分の生き方につなげてほしい。単なる調べ学習ではない。完結しなくていい。探求を通して琴線に触れ、自らの未来を展望する。テーマは壮大なのだ。ところで、大先生が子どもの前で授業をする姿を今日初めて見る事ができた。